

【報告要旨】

「ヒュームにおける穏和な情念・歴史・政治」

鎌田厚志（九州大学大学院協力研究員）

本発表の目的は、ヒュームの政治思想を「穏和な情念」と「歴史」をキーワードに考察し、ヒュームが同時代のイングランドにおける「自由」の内実について危機的な意識を持ち、その危機に対処するために、自由の歴史的 성격に配慮した政治思想を『人間本性論』『エッセイズ』『イングランド史』という三つの主著を通じて築き、展開したことを明らかにすることである。

先行研究においては、ヒュームの政治思想は、主に保守的な政治思想、つまり現状を追認・肯定するものであるとみなされてきた。たとえば、福田歓一は、社会契約思想は人間が作為的に政治秩序を構成する主体性を有していたのに対し、ロック後のイギリス政治思想はそうではなくなったとし、ヒュームをその例に挙げている（福田歓一[1985]）。

また、ヒュームの個別研究においては、ダンカン・フォーブズがヒュームを「懐疑的ウィッグ」としてとらえる解釈を示した（Forbes[1975]）。これは、ヒュームをトーリーではないとし、歴史的文脈によってヒュームの意図を再現し、ヒュームの政治思想を名誉革命後の確立された政権に対して、従来の政治思想では得られなかった知的基礎を与えようとした「懐疑的ウィッグ」だったとする解釈である。このフォーブズの研究を踏まえて、近年多くのすぐれたヒューム研究が日本においても積み重ねられてきており、それぞれにヒュームにおける文明社会への鋭い分析や、ヒュームにおける国制論、ヒュームにおける「両義性」と呼ばれてきた問題について、多くの解明がなされてきた。

これらの先行研究は、確かに、一面においては真実であり、ヒュームの重要な側面を明らかにしてきたものである。しかしながら、ヒュームは、当時の政権党であったウィッグに場合によっては大きな圧力や嫌悪を受けることを覚悟しながら、あえて『イングランド史』を世に問い、また、国債に対する批判を通して当時のウィッグ政権が遂行する対外戦争に対して強い批判を行い、政治社会における熱狂を鎮静化しようとするなど、必ずしも現状追認ではない側面も強く持っていた。

1、ヒュームが『人間本性論』以来、一貫して人間や社会の穏和化・穏健化を目指していたこと。2、『イングランド史』を通して経済的・文化的な進歩こ

そ「密かな革命」として政治の変化に先行するものであり、政治はこの経済や文化における変化を適切に理解し育むべきものだという、歴史への繊細な感覚と配慮をヒュームは確立したこと。3、この哲学と歴史の観点から、自由の歴史的な性格に配慮し、中産階級を育み守ることを目指し、商工業の中産階級が新たな政治的自由の担い手となることを目指したものがヒュームの政治思想だったこと。この三点を明らかにすることを、本報告は目的とする。